

人文会ニュース

2001. 3

- 書店人の見た「にし・ひがし」 ……隅山泰助 1
- 十五分で読む現代思想 ……的場昭弘 3
- アメリカの公共図書館事情 ……菱川摩貴 14
- 人文会研修旅行報告 ……弘報委員会 平石 修 23
- 99年度委員会活動について …… 27



何かあの人苦手だなと思ったら
**難しい性格の人との
 上手なつきあい方**

ルロール&アンドレ/高野優訳 どうしてよ
 いかかわらず、振り回されてばかりいるあ
 なたへ。うまくつきあう秘訣を一挙公開。
 「性格別自己診断表」付 ◆1800円

●好評発売中

自己評価の心理学

なぜあの人には自分に自信があるのか

アンドレ、他 恋愛、仕事、結婚、子育て…
 うまくいく人にはワケがある。◆2200円

怪しの世界

橋本治、夢枕獏、いとうせいこう

琵琶、講談、狂言——人気作家による台本に
 貴重な演者との対談、エッセイを取録。写真
 や註も豊富。監修：国立劇場 ◆1600円

紀伊國屋書店

出版部：東京都渋谷区東3-13-11
 TEL03(5469)5918 (営業) 表示価格は税別

地面の奥深くにアナザーワールドが

**未知なる
 地底高熱**

The Deep Hot Biosphere

トーマス・ゴールド著 丸 武志一訳

生物圏 46判・
 3800円
 (税別)

生命起源説をぬりかえる

地球の地殻の奥深く地上とは別の生物
 圏がある。しかもこの地底生物圏こそ
 地球生命発祥の地なのだ。著者の大胆
 な仮説がいま劇的に証明されつつある

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
 電話03(3813)4651(代表)
<http://www.otsukishoten.co.jp/>

勁草書房

上野千鶴子 編

構築主義とは何か

人文諸科学に圧倒的な衝撃を与え
 日々進化する方法の全て。2800円

D.ダニエル/田川建三 訳

ウィリアム・ティンダル

ある聖書翻訳者の生涯 宗教改革
 の渦中に立つ巨人の実像。8400円

中村桃子

ことばとジェンダー

<ことばを使う行為>と女/男のアイ
 デンティティの構築。2600円

東京都文京区水道2-1-1・価格税別
 Tel 03-3814-6861/Fax 03-3814-6854
<http://www.keisoshobo.co.jp>

◎21世紀最も議論された思想を今再検討する
 アソシエイト編集委員会 編 一六〇〇円

21世紀マルクスから何が見えるか

対談 ポスト現代のマルクス 山之内靖X的場昭弘/仲正
 昌樹・町口哲生・田中ひかる・高増明・松井暁・星野智・仲正
 エゾップ・小倉利丸・加藤哲郎・テブリックス・田畑裕・篠原
 敏昭・伊藤誠・内田弘・山本耕 他執筆

法と法外なもの ポストモダンの正義

仲正 昌樹著 A5判・二六四頁・二六〇〇円

近代の法哲学は万人の同権という自己自身の存立条件によつ
 て脱構築へと追い込まれている。法と法外の境線を照らす。

市民のための生命倫理——生命操作の現在

伊坂青司著(神奈川大学評論ブックレット15) 一八〇〇円
 高度化する科学医療・生殖・遺伝・死の操作などをめぐり、
 人間として超えてはならない限界と倫理のありかたを探る。

御茶の水書房 価格は税別

東京・文京区本郷5-30-20 ☎03-5684-0751

書店人の見た「にし・ひがし」

隅山 泰助

一九九九年の夏、五〇年間住み慣れた関西から関東に仕事の基盤を移して早一年半。碁盤の目の都市を形成している京都・大阪から、放射線状という東西南北が不明確な東京に移り住み、地名の位置関係が認識できず右往左往した状況から、少し解放されました。

二年半前に東京へ進出した大阪発のブックファースト渋谷店も、出版社の皆様のご支援や私どもの若いスタッフの日々の努力により、少しずつお客様のご支持を得ることができ、感謝しております。

少し余裕が出てきた日常の中、以前に読んだ大谷晃一著『大阪学』正・続と、小川和佑著『東京学』を読み直し、改めて東京での一年半を振り返ってみました。

それぞれの本にも書かれています東西の違い、とりわけ大阪と東京の差異は、都市の形成からそこに住む人達の気質や習慣および人間関係の差、さらにことばや味の違いなどに及んでいます。当然、根幹の部分では現在もその差はあるようですが、表面的にはその差異は少しずつ無くなっているように感じます。

人と人の日常生活における距離感のとり方や組織人氣質、ホンネとタテマエ論などでは、「昆布だしうどん」もお客様の言動や日々の生活の中で垣間見ることができそうですが、食文化においても、「昆布だしうどん」も食することができ、薄味の塩文化と濃厚な醤油文化、そして「赤信号みんなで渡れば怖くない」「整列乗車」などのマナーの面、さらに自分で目的の本を探さず書店従業員に聞こうとされる「時間の有効利用指向」などにおいて、交通機関とインターネットなどの通信手段の飛躍的な進歩と技術革新の結果、比較的東西の融合(?)が進んでいるように思います。

さて、このような背景の中、自分が属している出版業界の状況を振り返ると、東京というマーケットの奥行きの高さと幅の広さを実感しています。一般的に言われている出版業界の地域シェア率、関東圏五〇%、関西圏十八%という数字以上に、東西のマーケットの購買力に差があるように思います。

昨今の出版不況といわれる状況でも、東京の店頭に立ってそのデータを目の当たりに見ますと、新刊やベストセラー書籍の販売数字が、ピークの期間が過ぎてもなだらかに下降するように思います。また、比較的少数発行の書籍やこだわりの分野などでも、確実に存続できるマーケットがあるように感じます。恵まれたマーケット＝東京で、その差異をあまり気にすることなく仕事をするのができ、毎日目まぐるしく、楽しく生活しながら、一年半がアツという間に過ぎ去りました。

このようなマーケットの購買力の差は、越えられない問題ですが、情報などの格差は、いろいろな面でも無くなってきていると思います。出版業界もオンライン書店という新しい流れが現れ、またPOSシステムという非常に強力な武器をやっと導入し、動かしつつありますが、このシステムから得ることができるデータを、まだまだ活かし切れていないように思います。

旧態依然とした方法に固執するか、新しいシステムを盲信するという両極端な考え方の流れがあり、データをいかに解析するか、その解析結果をいかに現実の仕事に活かすかが、遅れているように感じます。旧来からの方法でも簡潔でスピーディーな部分と、新しいシステムから得られる厳正なデータをうまく融合し、その結果を書店の現場の担当者が変なこだわりを捨てて活かし、さらに高速道路（大量販売）と遊歩道（少数数販売）などの明確な分離により、流通問題の機会損失防止を計れば、一つの未来が開けるのではと思います。

東京と大阪文化の必然的な融合と同様、出版業界も早く新旧の良い部分を取り入れ、読者のニーズに对应えられる出版・流通を目指し、二十一世紀の再販問題などに、肩の力を抜いて取り組みれば良いのではと、考えているところです。

十五分で読む現代思想

的場昭弘

現代思想とはなにか―まずは全体を知る

現代思想をつかもうとすることは壮大な冒険である。それはなぜか。現代思想をつかむには、現代のあらゆる問題に精通し、現代の息吹を肌で感じとる感性が必要とされるからである。おそらく一人でこれを成し遂げるのできる人間はいない。だから当たり前のことだが、ある一人の思想家の理論を学んでも全体をつかむことはできない。もちろん、一人の思想家の理論を学ぶことは、目的に到達するための最良の手段ではある。すぐれた思想家とは、様々な問題に通暁し、現代の息吹を機敏に感じとった数少ない人物だからだ。また、現代思想はあれこれの流行の理論を学ぶことでもない。またたくまに消えて行く流行は所詮流行にすぎず、流行が過ぎ去った後には、振り舞わされた人間たちの屍しか残らないからである。

要するに、現代思想を「十五分で読む」ことなど土台無理なことだと初めに言っておきたい。しかし、おおよその見取り図くらいは描けないようでは現代思想という分野の

存立すら危ういかもれない。だから、ほんの一部のエキスをすぎないかもしれないことを前提に、おおよその見取り図を提示してみたい。

まずは、現代思想の全体の見取り図を描くには、どんな本を読めばいいか。講談社から今村仁司、三島憲一、野家啓一、鷲田清一編『現代思想の冒険者たち』（一九九六年―一九九九年）が全三二巻で完成したのが昨年のことである（補巻として矢代梓『年表で読む二〇世紀思想史』（講談社、一九九九年）があるが、これは極めて精緻な年表である）。この企画は、二〇世紀思想をフォローするという試みで、三〇人の思想家をとりあげている。全三〇巻を読みとることは至難の業であるので、もっと手早く教科書的に二〇世紀の思想家を知るには、今村仁司編の『現代思想ビープル』（新書館、一九九九年）がいい。一人一人には二頁しか割かれてないが、その数では『現代思想の冒険者たち』を凌駕する。こうしたタイプの人物による現代思想入門は、メジャーな思想家を知るには大変便利な書物であるが、実は現代思想

を知るには少し古いやりかたとも言える。現代思想において最近話題となっているカルチュラル・スタディーズ、オートポイエーシスなどを知るにはあまり役に立ちそうもない。その理由として、現代思想の潮流がもはや何人かの大家によって作られる時代が終わったこと、学問分野が社会科学、人文科学、自然科学の境界領域を不分明にしていることなどがあげられる。複雑系や生物学が思想に乱入してくる状況、クレオールやサバルタンが問題となる中で大家の活躍する場合は次第に狭められていとも言える。

そうした中で、現代思想をとらえるには、むしろ用語から迫るといふパターンがあり得る。『現代思想』（青土社）の臨時増刊（二〇〇〇年）「現代思想のキーワード」はその点便利である。「公共圏」「カルチュラル・スタディーズ」「ポスト・コロンIAL批評」「フェミニズム」「システム」「科学論・生命論」という組立は、現代思想を俯瞰するにはもってこいの配置である。ただ、内容は短く物足りない。そういう読者には、岩波書店から出た『講座 現代思想』（全一六巻）をお薦めする。これも用語を中心としている。しかも、二〇世紀全体への気配りがなされ、一つ一つの論文が長くしっかりしていて、読みごたえがある。ただし、これも全一六巻であり、読み通すのはしんどい。その意味では鷲田小弥太編『現代思想がわかる事典』（日本実業出版社、一九九四年）は短く、わかりやすい問題が語られており、事典でありながら通読できる書物である。

現代思想を知るためのキーワード

現代思想の領野に入った読者を惑わすものは、いったい現代思想では今いったい何が問題になっているのかということであろう。確かに、テーマや用語はふんだんにある。しかし、それは全体を捉えるようなキーワードではない。もちろん、全体はきわめて広くそれを一つや二つのキーワードで締め括ることは不可能に近いだろう。ただ、全体の傾向を知るためのいくつかのキーワードはある。

現代思想は、一九六八年五月革命をその象徴的分岐点として大きく変容していく。政治的には民族独立、経済的には経済成長が戦後の世界の牽引車であった。西欧を雛形とする近代国民国家を設立し、国民としての人権を保障することが戦後の最大のテーマであったといってもよい。戦後を彩ったマルクス主義、実存主義、ヒューマニズムは、その意味で西欧的近代主義がもたらした近代国民国家を作り上げるための方法の一つとして考えられていたとも言える。ところが五月革命の頃を境として、国民国家の中にあるさまざまな差別が問題となり始める。外国人移民労働者の問題、フェミニズム、環境問題は近代化にともなう負の遺産として俄然注目を浴び始めるのである。

もっとも、西欧近代主義への批判は、実は一九二〇年代にあらかた出現していたとも言える。サルトルの『嘔吐』やカミュの『異邦人』、ハイデガーの『存在と時間』などは西欧近代主義のもつ異常なまでの厳格さが、社会を蝕ん

でいくことを指摘していたとも言える。しかし、戦後の思想は彼らの思想を一端西欧近代主義に塗り替えてしまう。西欧近代主義自体に巣くんでいた破壊的要素を充分反省せず、西欧を理想化し、問題を西欧化の不徹底という形で塗り替えたからである。戦後は不徹底な西欧をより西欧化し、アジア、アフリカを西欧化することに全力がそがれる。社会主義陣営のマルクス主義と資本主義陣営のヒューマンイズムは二つとも徹底した西欧化のための手段であったと言える。

なぜ戦後、非合理主義的思想が合理主義へ塗り替えられたかは議論すべき重要な問題であるが、ここではこれ以上言及しない。五月革命以後に始まるポストモダニズムの原型が一九二〇年代にあったことを指摘するだけで重要である。それは流行と揶揄されたポストモダニズムこそ、脈々と続く二〇世紀思想の正統の嫡子だからだ（もっともポストモダニズムへの批判も多くある。フェリーとルノーの『六八年の思想』法政大学出版社、一九九九年、ソーカルとブリクモンの『知』の欺瞞』岩波書店、二〇〇〇年、テリー・イーグルトン『ポストモダニズムの幻想』大月書店、一九九八年）。

ポストモダニズムが与えた大きな影響は、まず西欧型社会への疑問である。現代思想のキーワードは、まさにこの西欧型社会への疑問にある。といってもポストモダニズムがそれであるわけで、もっと言葉を絞らねばなるまい。私は、五月革命以後の現代思想のキーワードは、「サバルタ

ン」「他者」「沈黙」であると考えている。これらの言葉に共通するのは、今まで言及されることのなかった人々をどう捉えるかという点である。

「サバルタン」という言葉は、スピヴァクの『サバルタンは語るることができるか』（みすず書房、一九九八年）という本で一躍有名になった。サバルタンとは植民地の最下層にいる人々のことである。もっとも虐げられた人々は語らない。ということ、エリートである思想家が語る思想は彼らの意図を含蓄していないということになる。能弁に語る思想家にとって、語らないサバルタンはよそのもの（他者）である。

「他者」ということを問題にし続けたのはリトアニア生まれのフランスの思想家レヴィナスである。彼が語ったことはこうである。主体が他者を通じて自己を確立していくこと、それは同一性の哲学である。しかし、同一性の哲学にはつねに他者を、主体が自己を確立するための手段としてしかみようとしない。他者から主体を見るときどうなるか。主体は他者の媒体にすぎなくなる。他者とは何もかたらずに消えていった名もなき多くの人々のことである。レヴィナスの思想を知るには、『存在の彼方へ』（講談社学術文庫、一九九九年）と『レヴィナスコレクション』（ちくま学芸文庫、一九九九年）がいいが、ちょっと難解なので合田正人『レヴィナスの思想』（講談社文庫、二〇〇〇年）、港道隆『レヴィナス』（現代思想の冒険者たち）一七巻、講談社、一九

九七年、サロモン・マルクスの『レイヴィナスを読む』(国文社、一九九六年)、熊野純彦『レイヴィナス』(岩波書店、一九九九年)がお薦めである。

「沈黙」という言葉は、二〇世紀もっとも進展した分野、テキストの解釈学と深い関係がある。言語をたぐるエリートである思想家は、いわば権力のコード体系に組み込まれた存在であり、コード体系の外にいる他者である沈黙している人々を一方的な眼差しで見ると同時に、思想家自身も実は自分が書いているものが、沈黙しているものになど伝わっているかを知っているわけでもない。自らの思想がちゃんと伝わっているように書いて、その実まったく誤解されているということ。脱構築、脱臼などということばでデリダが問題にしたこと、間テクスト性でクリステヴァが問題にしたことなどは、まさにこれにあたる。著者も死と同時に沈黙の他者の位置を占めることになるのである。クリステヴァについては、西川直子『クリステヴァ』(『現代思想の冒険者たち』、講談社、一九九九年)がよい。

「サバルタン」「他者」「沈黙」という言葉によって現代思想で問題にされていることは、西欧以外のアジア、アフリカをどう取り扱うかという問題と深く結びついている。カルチュラル・スタディーズやオリエンタリズムはまさにこれである。五月革命以後生まれた西欧的眼差しへの批判によって、西欧はアジア・アフリカの未来ではなくなくなってしまった。アジアもアフリカも同時に併存していて、どち

らが未来で過去ということもなくなっている。このことが人々の歴史への関心を希薄にし、現在へと収斂させている理由である。

つまりポストモダンの作り出した世界とは、現代以後が見いだせない世界である。あえてそれをポスト現代と名付けておこう。現代思想はポスト現代の中でさまよっているのである。

現代思想の問題

1 ポスト現代

最近もっとも大きな話題を呼んだ問題は、フランシス・フクヤマの「歴史の終焉」であろう。『歴史の終焉』(三笠書房、一九九三年)という著書は、時代の言葉にすらなってしまった。ソ連崩壊によって自由主義的民主主義は、対抗する勢力を失い、人類の最終目標となったのである。ヘーゲルの歴史哲学の議論を受け、歴史を始原と終焉と考え、大胆にも終焉を提示したところに議論の味噌はある。しかもソ連崩壊と呼応したところによって大きな反響をえた。しかし、自由主義的民主主義の実体が、終焉を望まない資本主義であることによって、この議論はすぐに悪しき歴史主義に分類されてしまう。むしろここで重要な問題は、世界史は普遍史であるのかどうかということの方である。

アジアやアフリカも自由主義的民主主義に進むのか。歴

医療倫理 2

ベンス 遺伝子診断とプライバシー
人工臓器と移植臓器の配分など、最先端医療の倫理的諸問題をわかりやすく解説。臨場感あふれる事例研究。宮坂・長岡訳 ¥5500

六月の長い一日

グルニエ シモンはなぜ姿を消したのか？ 老いの迫る男女が、戦後の青春を語り合う長い午後、人生の苦い真実が浮かび上がる。自伝的小説の佳作。山田 稔訳 ¥2300

この道を行く人なしに

ゴードイマ 南アのノーベル賞作家が、アパルトヘイト崩壊後の混乱のなかで、果敢に生きる女性の充実感と孤独を描く。題名は芭蕉の句による。福島富士男訳 ¥3500

バンドシニスター

ナボコフ 最愛の妻をいま失い、一人息子と残された哲学教師クルーク。待ちうける警察国家と總統パドック。深い優しさがこごむ苦悩の果てには。加藤光也訳 ¥2400

蒋介石書簡集 下

1912 - 1949

宋平他編 日中戦争から国共内戦へ。西安事変、重慶談判と激動する東アジア現代史の決定的瞬間を証言する。詳細な注・年表を付して全3巻完結。鈴木 博訳 ¥20000

月刊 みすず 3月号

記憶の残酷さ・サイド／中川幸夫：オリーブの森と小川の物語・佐谷和彦／ダーウィン＝ウォーレス往復書簡／公衆の誕生・水林章／合田正人／池内紀ほか ¥300

東京文京本郷
5丁目32-21 みすず書房
tel.3814-0131 fax.3818-6435 (税別)
http://www.msuzo.jp

史はつねに闘争の歴史であり、終焉をもつことはないというハンチントンの『文明の衝突』（集英社、一九九八年）は、資本主義対共産主義との対抗という機軸を失った論壇に、西欧文明と非西欧文明との対立という機軸をもたらし、しかし、西欧文明と言われるものが、近代を内包しているものである以上、イスラム文化の中にも類似した要素がある。対立するように見え、実は似ているというのも事実であろう。他者としてのアジアやアフリカは、単純に敵としてだけ位置づけられるようなものではない。終焉にしろ、衝突にしろ、それらが注目を浴びるのは、資本主義が停滞し、その脱出口を探れないという現実から出ている。後期資本主義がそれを象徴する。この言葉はマンドルの浩瀚な書物『後期資本主義』（柘植書房、一九八〇—八二年）によって一般に知られるようになった。一九七〇年代から資本主義は抜け出せない長期不況に入っている。

確かに一部好況の国はあるが、全体としては行き詰まっている。こうした状況にもかかわらず、巷ではさほど危機感があるわけではない。ベンヤミンの『パサーージュ論』（岩波書店、一九九三—九五）にファンタスマゴリー（幻想）という言葉があるが、まさに人々は資本主義の中で幻想に生きているといえなくもない（ベンヤミンについては『ベンヤミン・コレクション』ちくま学芸文庫、野村修『ベンヤミンの生涯』平凡社ライブラリー、一九九七年、三島憲一『ベンヤミン』現代思想の冒険者たち）講談社、一九九八年などがある。トムリンソンの規定する『グローバリゼーション』（青土社、二〇〇〇年）は、世界の空間的距離が小さくなっていくことである。かつて歴然とあった先進国と後進国との経済的、文化的差異が少なくとも表面的には消え失せていることがそれを象徴している。いったい今自分がどこにいるのかもわからないような世界の高質性こそ、グローバリ

ゼーションと言える。とはいっても後進国がなくなつたわけでもない。そこにつねに問われ続けなければならない、西欧の他者としてのアジア・アフリカの問題がある。

グローバリゼーション(『グローバリゼーションを読む』情況出版、一九九九年参照)はあらたな不平等をもたらしうることも事実である。こうした不平等をどう考えるかという点で、アメリカのロールズの『正義論』(紀伊國屋書店、一九七九年)のような議論が問題となる理由がある。市場を通じては不平等を改善できないという問題は、平等を保障するための社会契約のあらたな必要性を生み出す。反照的均衡というロールズの言葉は、道德的判断を下すための調整過程のことをいうが、不平等への社会的申し立ての問題がそこにはある。もっともロールズは平等よりも自由を優先するので、平等を強く求めるべきだというハーバーマスの討議倫理、コミュニケーション的行為(『コミュニケーションの行為の理論』未来社、一九八四―八六年)という主張もある(ロールズについては、川本隆史『ロールズ』(『現代思想の冒険者たち』講談社、一九九七年)があり、ハーバーマスについては中岡成文『ハーバーマス』(『現代思想の冒険者たち』講談社、一九九六年)がある)。

しかし、ロールズにしても、ハーバーマスにしても西欧的な合理主義的人間が最初から前提されていることに変わりはない。こうした微細な調節機構ではなく、もっとはっきりとした平等実現のための大きな未来図がないのだから

か。確かに、未来社会の理想は語りにくくなっている。最近ウォーラーシュテインが言っている『ユートピアステイクス』(藤原書店)なる議論、すなわちユートピアではなく、現実の問題を解決するための選択肢の一つなどはその典型とも言える。あえてユートピアという言葉を使つてないのは、その空想的という意味ではなく、現実適応能力に強調点があるからである。未来への強烈な目的意識に対する恐怖は現代思想共通の問題である。それは、現代社会があらかた発展しつくしていて、つぎに起こる未来が容易に描けなくなっているだけではなく、人間社会の諸機構がまるでそれぞれ生き物であるかのように、かたてに動き、かたてに未来を作っているかようになってしまっているからでもある。このことをシステム論というが、ルーマンが提唱したシステム論は、そうした人間不在の世界を象徴している(『自己言及性について』国文社、一九九六年)。

2 システム論

オートポイエーシスという言葉はもともと自然科学の言葉であったが、最近現代思想の中でもよく使われるようになってきた。自己制作という訳が与えられているが、ルーマンは自己言及システムと呼んでいる。人間が作り出した社会が人間を飛び越して自由に運動していくことは特別新しい発想ではない。しかし、この議論は最近の生物学の研究を反映していて、目的論的未来社会批判への大き

な力となっている（オートポイエーシス自体の議論は、河本英夫『オートポイエーシス』（青土社、一九九五年）、『オートポイエーシスの拡張』（青土社、二〇〇〇年）が詳しい）。

人間の主体性や目的意識をなくすことによって、人間社会の姿がいわばファジーに現れてくるというのがシステム論の発想である。ドウルーズとガタリが『千のプラトール』（河出書房新社、一九九四年）で展開した戦争機械という概念もシステム論的に解釈し得るであろう。戦争機械はもともと遊牧民族が、移動するために都市を破壊する道具であったという。この道具がいつのまにか都市のものとなり、都市防衛の道具、さらには国家のものとなり、国家防衛の道具となる。しかし、国家防衛のための戦争機械が、国家を危機に晒す道具へと発展している。国家は戦争機械を縮小できず、ますます戦争機械に従属しているのが現在である。戦争機械は国家という意志主体が処理できないまでに自己発展を遂げているとも言える。

その意味では国家が防衛のためにとった総力戦も同じ戦争機械かもしれない。敵に対する臨戦体制が、階級対立を国家対立に変形し、社会福祉と翼賛体制を作り出していったとすれば、総力戦型体制は戦争の終了とともに終わるはずである。ところが、戦後の発展はまさにこの総力戦型体制の上に築かれている。国威発揚と経済成長はまさにその典型である。

冷戦構造の崩壊によって総力戦体制が崩壊するかという

と、むしろ反グローバルゼーションの運動として再展開していく。国民の失業への保護対策、福祉への対策として、形を変えてきたたかに総力戦体制というシステムは生き抜いていく。総力戦体制については、山之内靖編の『総力戦と現代化』（柏書房、一九九五年）が詳しい。

レギュラシオン理論もある意味では、このシステム論に近いとも言える。自動車の大量生産を行ったフォードが、労働者の賃金引き上げを積極的に図り、購買力を増大させたことは、賃労働と資本との新しい展開を意味していた。フォードイズムという言い方がされるが、こうした体制は労資協調という路線の亜種とも言える。しかし、階級闘争といった路線を内部から崩壊させていくシステムとして機能したことも事実である。レギュラシオンについて知るには、ロベール・ボワイエ『入門・レギュラシオン』（藤原書店、一九九〇年）がいい。

システム論における最大の問題は、人間社会のシステムが生物のシステムのようにはたして人間の主体性を抜きに成り立ち得る物かどうかという点にある。その意味で、デヴィッド・ハーヴェイが展開している空間論は、システム論の背後にある資本という主体の隠蔽工作を暴くことにある。ハーヴェイは『空間形成の理論・資本の限界』（大明堂、一九八九―一九〇年）の中で、労使対立が緩和したのはシステムの変容ではなく、資本による空間の配置替えだと考える。国内において労働者を分散させることは、労働者の

団結と闘争を弱める。同じことは、国際的にも工場を海外へ分散させること、移民労働者を受け入れることによっても行われている。空間の編制替えこそ資本の主體的な作用であり、システムなどではないと主張している。システム論に対する不満は、先進諸国の後進国への差別や眼差しがあるにもかかわらず、それが不明確である点にある。社会問題が、人間が統御できないシステムの中に組み入れられたのでは、問題の解決は絶望的になる。とりわけ、システム論的にみて弱者の立場に立たざるをえない人々をどうするかという問題が、システム論に問われている問題とも言える。システム論で他者が見えないのか。

3 ポスト構造主義

一九七〇年代以降、フリーコー(桜井哲夫『フリーコー』(『現代思想の冒険者たち』講談社、一九九六年)やアルチュセール(今村仁司『アルチュセール』(『現代思想の冒険者たち』講談社、一九九七年参照)を中心としたフランス思想はポスト構造主義、ポストモダンとして現代思想を席卷した。現在その創始者たちの偉功は弱まっているが、彼らの思想のいくつかはいまだに大きな影響力をもっている。その思想が生き延びている面をあえて言えば、彼らの思想が他者、サバルタン、沈黙といった現代のキーワードの方法論に大きな影響力を残しているからである。ここで徴候的読解、国家イデオロギー装置、重層的決定、脱構築、認識論的切

断について見ていこう。

アルチュセールが『資本論を読む』(ちくま学芸文庫、一九九六年)の序文で展開したのが徴候的読解である。徴候的読解とは、著者が見てはいたが問題にすることさえできなかったものを読解することをいう。その意味で徴候的読解とは、著者の沈黙の部分を読み込むことである。ガダマーが『真理と方法1』(法政大学出版社、一九八六年)で展開した解釈学は、解釈する人間の存在への問いかけである。徴候的読解もその点でよく似ている。読解とは、読者が自らを理解することでもあるからである。現在に生きるわれわれが著者の語らなかつたことを読みとるということは、現代の問題にそれを置き換えるということの意味している。

国家イデオロギー装置という概念は、アルチュセールが『国家とイデオロギー』(福村出版、一九七五年)で展開したものであるが、集団意識を決定するさまざまな施設、制度のことを意味している。それは国家とは直接にむすびつかない新聞などのメディアについても言える。こうした複合的な諸機関が、イデオロギーに大きな影響を与えるという国家イデオロギー装置の概念は、最近のカルチュラル・スタディーズ研究の理論的中核をなしている。

これと同じ様な意味では、アルチュセールの重層的決定という考え方も最近の文化研究に大きな影響を与えていると言えよう。『マルクスのために』(平凡社ライブラリー、一九九四年)で述べられた概念で、マルクスが『経済学批判』

(大月文庫)の序言で定式化した史的唯物論の公式をより精緻にした概念とも言える。資本主義社会がなぜ革命へと進まないか、それは革命を避けさせるさまざまな要因が働いているからである。その要因とは、文化やイデオロギーであるが、それらが重層的に作用しているからである。重層的決定の細かい分析が、カルチュラル・スタディーズなどの文化研究に影響を与えたことは間違いない。

デリダ(『デリダを読む』情況出版、二〇〇〇年参照)の言葉であまりにも有名になった感のある脱構築とは、あるテクストをその文脈からはずし、まったく新しい文脈で捉え直すことであるが、デリダの翻訳を行ったスピヴァクなどのサルタン研究の中で、それは再利用されている。非西欧諸国の脱構築こそ最近の現代思想の流行であるが、こうした脱構築は、西欧のたんなる他者でない非西欧を作ることを意味している。フーコーが一九六〇年代に展開した概念にヘテロトピアというのがある。ヘテロトピアとは第三の空間ということであるが、現実には刑務所や精神病院など、「普通でない人々」の世界をいう。西欧対非西欧という二項対立は、結局の所非西欧が西欧化するだけになる。それでは西欧から抜け出られない。非西欧は永遠に西欧の他者にすぎない。ラカン(福原泰平『ラカン』(『現代思想の冒険』)、講談社、一九九八年参照)が鏡像という概念を使っていたが、まさに非西欧はその鏡像の中で西欧を写す鏡にすぎないとも言える。そこで、二項対立を克服するためには、

非西欧がまったく西欧と異質の空間に進むことが必要である。その意味でヘテロトピアとは、そうした異質の空間である。この異質の空間こそ脱構築された非西欧ということであろう。

認識論的切断もアルチュセールが『マルクスのために』で使った言葉である。アルチュセールがマルクスの初期と後期の方法論の位相の違いを表すために使った言葉である。いわばパラダイムの転換といってもいいのであるが、アルチュセールの使った意味はもっと大きなものである。つまり、新しい方法は予感にしかすぎず、新しい方法は古い時代の言葉を使ってしか書けないという難しさを最初からはらんでいるからである。思想の最大の貢献者は、旧来の思想を解釈したり、読解したりする人ではなく、新しい思想を旧来の思想で垣間みさせてくれる思想家ということになる。ポスト構造主義の思想家がそうした認識論的切断に気づいたとしても、それだけで新しい方法が生み出されるわけではないという点で、今待たれるのはこうした思想家の出現かもしれない。

4 カルチュラル・スタディーズ

現代思想でもっか流行中のものは何であるかといえば、やはりカルチュラル・スタディーズであろう。まず裾野の広がり具合からみても、その影響力の大きさに驚く。かつて第三諸国の研究といわれた非西欧の地域研究者の研究が

まず全部この中に含まれてしまうということ、さらにロック、パンクなどの学問の対象外であった領域まですべて含まれてしまうことにおいて、その影響範囲は巨大である。

そもそもカルチュラル・スタディーズの芽は、一九五〇年代イギリスのバーミンガム大学の市民講座にあった。正統派マルクス主義に抵抗するグループが、アルチュセールなどから思想的影響を受け、西欧文化へ疑問を突きつけるカルチュラル・スタディーズが展開するのである。ステュアート・ホール（『現代思想、特集、ステュアート・ホール』青土社、一九九八年）などの名前は、今では一般的な名前になった感がある（ターナーの『カルチュラル・スタディーズ入門』（作品社、一九九五年）は英国における発展の詳しい歴史を紹介している）。カルチュラル・スタディーズは、イギリスやアメリカといった先進国から始まった周辺文化の見直し運動である点において、当然西欧文明の周辺にいた非西欧諸国の人々の関心をひく。

カリブ海地域の脱植民地化の中で出てきた混血による新しい国家、文化運動はクレオールと呼ばれる。シャモワゾーとコンフィアンの『クレオールとは何か』（平凡社、一九九五年）はその古典とも言われる作品である。黒人でも、白人でもない混血性に未来を託す思想は、初めは白人男性による黒人女性へのレイプといった問題をはらんでいた。また黒人のコンプレックスを中和する役割を担っていたとも言える。

その意味で、黒人文化への礼賛を謳うネグリチユードも消えたわけではない。エメ・セゼールの『帰郷ノート、植民地主義論』（平凡社、一九九七年）はその古典である。黒人文化の総合性を高らかに謳ったこの作品は、しかし、他方で白人文化が黒人文化に押しつけた偏見を上塗りしているだけにすぎないとも言える。

西欧列強の偏見をもっとも告知しているのが、植民地文学とも言える。植民地文学とは、宗主国の文学であり、植民地のエリートの文学である。しかし、独立後植民地文学は西欧文学の植民地批判を受け、急速に脱植民地文学へと変貌していく。しかし、その脱植民地文学の理論を支えたのはポストモダンの西欧思想であり、批判的だとしても新たな西欧思想の植民地と化すことになってしまふ。こうした状態をポスト・コロニアルというが、ビル・アッシュクロフト等による『ポスト・コロニアルの文学』（青土社、一九九八年）がそれについては詳しい。

ポスト・コロニアルの言説とは、帝国の言説でもある。帝国とは植民地を支配した国家のことを言う。現在植民地をもつ国家は原則的でないが、今でも宗主国の影響はあらゆる面で強い。資本や文化だけでいう限り独立できている国は非常に少ない。文化的、人種的優越意識が帝国意識なら、今でもなくなっているわけではない。移民労働者によってむしろ人種的、文化的優越性は逆に再び生まれつつあるといってもよい（これについては北川勝彦他編『帝国意識の解

剖」(世界思想社、一九九九年)が最適である)。

最近レイ・チョウの書いた『ディアスポラの知識人』(青土社、一九九八年)が話題を呼んだが、これは先進諸国で暮らす、後進国の知識人の状態について書いた本である。英語やフランス語を書くこれら知識人の役割とは、西欧人の作り上げたアジア、アフリカ像を後進国に普及することである。彼らは能弁であるために、より一層ポスト・コロニアルの一般的言説を流布する宣伝マンにさせられてしまう。まさにこうした悲哀のことをディアスポラ(離散)と言っているのである。カルチュラル・スタディーズ研究への批判として、結局それまで作られてきた西欧人のアジア・アフリカに対する偏見を上塗りしたにすぎないではないかということが指摘されるのも、もっぱらそうした側面があるからである。

とはいっても、カルチュラル・スタディーズによって、アジア・アフリカの思想に、それなりにオリジナルな対象領域とオリジナルな思想への探求の芽が芽生えているのも事実である。非西欧思想はありうるのか、非西欧は所詮西欧の思想によって位置づけられるだけの存在なのか、それらは今後の研究が決めていくであろう。その意味で、思想とは西欧のエリート思想家によって作り出される言説ではなくなりつつある。思想が生まれるのは異質の情報を持つた人々によってであり、しかもそうした人々同士が接触する地点であろう。だからあえてアジア的である必要も、ア

フリカ的である必要もないだろう。それらは、西欧人にとつて単に彼らのエキゾチックな興味を満足させるだけだからだ。これから思想を生み出していくのは、文化の混交と異境空間であると思われる。

『知恵蔵』(朝日新聞社)掲載の、著者執筆の項目「現代の思想」を参照していただきたい)

まとは あきひろ 一九五二年生まれ。神奈川大学経済学部教授。『トリーアの社会史』(未來社)、『パリの中のマルクス』(御茶の水書房)、『フランスの中のドイツ人』(御茶の水書房)、『マルクスがわかる』(編 朝日新聞社)、『新マルクス学事典』(共編 弘文堂) ほか。

アメリカの公共図書館事情

菱川摩貴

社会のいわばインフラ的役割を果たしてきたアメリカの公共図書館。チェーン・ストアやインターネットが出現、拡大するにつれ、公共図書館の役割はどのように変容してきたのか。今回はアメリカ公共図書館をめぐる最近の話題や、図書館と出版社、取次、書店との関係を追う。

公共図書館は「アメリカ社会の進歩に欠かせない機関」

全米には現在約三万二八〇〇余りの図書館があり、そのうち約一万六二〇〇館を公共図書館が占める。その「黄金時代」は一八五〇年代から第一次世界大戦の間に訪れたといわれる。一八五〇年わずか五〇程度だった公共図書館の数が、一八七五年までに三〇〇に増え、二〇世紀初めまでには数千にまで膨れ上がった。こうした公共図書館の発展は、当時の大富豪、アンドリュー・カーネギーの寄付に大きく困ったといわれる。図書館が公共の学校と同様に「アメリカ社会の進歩に欠かせない機関」であるという認識が一九世紀末当時広がりつつあったのに応え、カーネギーは

私財を約二〇〇〇の公共図書館建築に費やしたのだ。

社会に担う使命とその発展が他国のお手本にまでされたアメリカの公共図書館だったが、二〇世紀半ばに至ると、テレビ、ラジオ、映画といった他の娯楽・情報源におされた。また、一九八〇年代から一九九〇年代半ば、スーパーストアとよばれる大型書店が幅広いジャンルの本を手頃な値段で提供し始めると、公共図書館の主な利用者層であった中流階級が図書館より書店に足を運ぶようになった。特にバーンズ&ノーブル、ボーダーズといった大型書店や一部の独立系書店は、単なる本屋にとどまらず、様々なイベントを通じて、各地域コミュニティの社交の場まで提供し、図書館の御株まで奪ったのだ。そして、インターネットの登場によって、かつての利用者は図書館まで足を運ぶまでもなく、自宅のパソコンで簡単に情報収集ができるようになった。

米業界紙『ライブラリー・ジャーナル』（二〇〇〇年二月）の調べによると、調査対象の公共図書館一〇〇館のうち五一％が利用者の減少を指摘し、そのうち九五％が個人

によるインターネット利用の増加を、原因に挙げている。

増える予算、図書館市場に高まる出版社の関心

しかし、最新の『ライブラリー・ジャーナル』（二〇〇一年一月）の調べによると一人当たりの公共図書館利用数は一九九九年の八・一回から二〇〇〇年八・二八回と微増している。また運用費用の大半が地方税でまかなわれる公共図書館の年間予算をみても、地域によってばらつきがあるものの、全体的に増加傾向である。

例えば、数百の公共図書館を対象とした業界紙の調査によると、ここ数年の全体予算は、前年比四・四％増（一九九九年）、七・五％増（二〇〇〇年）、六・五％増（二〇〇一年）、書籍等の購買予算も、前年比六・五％増（一九九九年）、八・八％増（二〇〇〇年）、四・五％増（二〇〇一年）と着実に増えているのだ。「一九八〇年代半ば以来の反映ぶり」（『ライブラリー・ジャーナル』二〇〇〇年一月号）と称されるほど公共図書館の財政が潤っている理由に、未曾有の経済成長、低いインフレ率などが挙げられる。

また近年、地方政府が公共図書館を、コミュニティに不可欠なサービスとみるだけでなく、「地域活性化、生活の質の向上といったリターンが期待できる投資」（『ライブラリー・ジャーナル』二〇〇一年一月号）として見直し始めた点も大きいようだ。

確実に成長する図書館市場への関心が、出版社の間で近

年高まってきたというのは業界関係者の一致した見方だ。二十数億ドルと、米国全書籍市場の一〇％を占める図書館市場では、書店と違って、返品率の心配がない。特に一九九〇年半ば出版社の返品率の上昇に悩んだ米国出版業界にとって、図書館市場はますます魅力的に映ったようだ。

業界紙『ライブラリー・ジャーナル』の編集者として長年、米国の図書館市場を見てきたフランシン・フィアルコフさんは「出版業界最大のイベント『ブック・エキスポ』に参加しても、書店とは別扱い。書店には無料で配布される新刊書も図書館員には配られなかった」と、図書館員が出版社から軽視された時代を振り返る。しかし、一九九六年ごろから流れが徐々に変わったという。「出版社は、図書館に作家を送り込むなどして積極的に売り込めば、時には二大書店チェーンより本が売れることに気づき始めた」というのだ。

例えば、アメリカ図書館協会が毎年二回主催する展示会、「ミッドウインター・ミーティング」と「アニニアル・コンフィランス」では、業界紙や、図書館の活動をボランティア等を通じて支援する草の根組織「フレンズ・オブ・ライブラリーズ」(FOLUSA)が出版社と協力して、作家を招き、図書館員向けにサイン会や講演会を行っている。今年一月二日から一七日ワシントンDCで開催された「ミッドウインター・ミーティング」でも、FOLUSA主催により、四人の作家を囲んだ朝食会が行なわれた(写真1)。

招待された作家たちは、それぞれ図書館にまつわるエピソード

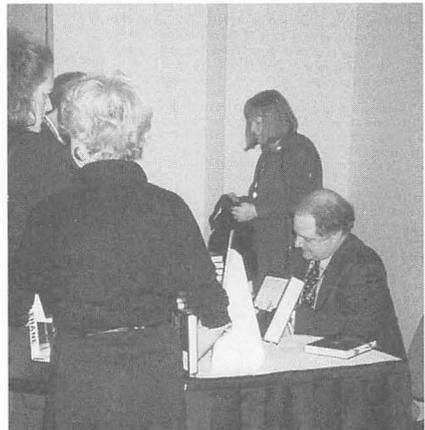
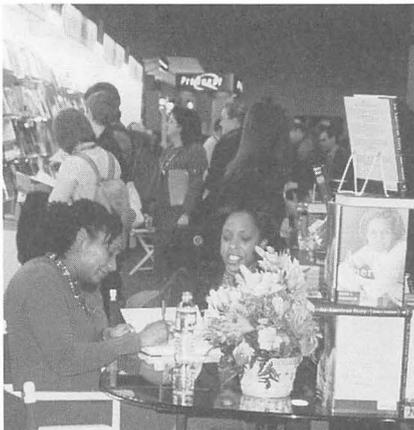


写真1 FOLUSA主催の朝食会（上）。



写真2 図書館員を前に自分の図書館経験を語るデブラ・ディクソンさん（中）。

写真3 サイン会で話し込む著者と図書館員（下）。



ソードを披露。例えば、都市部の貧しい家庭に育ち、「一八歳になるまで本屋で本を買った覚えがない」という黒人女性作家のデブラ・ディクソンさん。膨大な量の本をただで読むことができる図書館が自分にとって「天国」であり、また「安全」な場所であった幼少期を振り返り、自分の人生に図書館が与えた影響の大きさを集まった図書館員を前にユーモアをたっぷり語った(写真?)。

またキャリー・ブラウンさんはデビュー作(『バラの庭』)が図書館向け雑誌『ライブラリー・ジャーナル』に書評され、にわかに注目を浴びるようになったといわれる作家だ。図書館でしかみつけれられないような専門書が、作品の登場人物の設定・肉付けに役立った点を強調し、「貴重な資料を供給していただいた図書館に心から御礼申しあげます」と締めくくった。

朝食会後は会場、または各出版社のブースでサイン会が行なわれ、図書館員は、各作家に直接話ができる機会が与えられた(写真?)。イベント終了後に、「この本、必ず読むわね」と各出版営業担当者に話し掛ける図書館員や、「作家に『図書館は私の一番お気に入りの場所』って言うてもらおうといい気分よね」と話し合う図書館員の姿が印象的だった。

この朝食会に、デボラ・ディクソンさんとニューヨーク・タイムズ紙の演劇批評家、フランク・リッチ氏の二人の作家を送り込んだ最大手の出版社ランダム・ハウスでは、大人向け図書専門のマーケティング担当グループが、定期

的に三〇〇四〇の公共図書館と協力し、作家を招いたイベントを行っている。他の図書館でも、希望と条件が合えば随時受け付けているという。

「確かに以前に比べて多くの出版社がサイン会や朗読に作家を図書館に送り込みたがるようになった」と語るのは、ワシントンDC公共図書館図書館員のダイアン・モーアさん。メディアが集積しているワシントンDCでは、地元作家も多いことから、同図書館ではブランチとよばれる支部図書館を含め、作家を招いたイベントが盛んだ。例えば、ワシントン・ポスト紙の社主キャサリン・グラハム女史が自伝『パーソナル・ヒストリー』を刊行したときも、著者が住むワシントンDC・ジョージタウン区の支部図書館でイベントが開催されたという。同図書館では一九九九年一月「本の中心地」に認定され(注一)、読書推進活動にさらに力を入れていることから、作家イベントを開催する機会がさらに増えたいう。

公共図書館ではこうしたイベントを、図書館運営に必要な資金集めに利用する場合もある(注二)。例えば朝食会を配るなどしてイベントを有料にしたり、近隣の書店と共催してイベントを行い、イベント当日の本の売上の一部を図書館に寄付してもらおうといった形をとるのだ。バーンズ&ノーブル(B&N)や地域の独立系図書館と協力して作家イベントを行うフロリダのプロワード区公共図書館では、毎年恒例のイベント「文学の祭典」を通じて約二万七〇〇〇ドルの資金集めに成功したともいう。「図書館と近隣の

本屋の協力イベントは成功率も高い」と出版社の図書マーケティング担当者は語る。

作家にとっても図書館は貴重な顧客だ。確かに何百万部も売れるベストセラー作家にとって、一万六〇〇〇の図書館がたとえ一部以上購入しても売上に占める割合は大した数字ではない。しかし発行部数一萬部、一万五〇〇〇部といった、いわゆる「ミッドリスト・タイトル」とよばれる作家にとって、図書館は生命線だ。「四〇〇〇の公共図書館が一部ずつでも買ってくれなければその本はお仕舞い」とランダムハウス図書マーケティング部長のマルシア・プーセルさんは語る。

またデビュー作が図書館にアピールできるかどうかも重要だ。「たとえウィンドーに飾っても数日で売れなければすぐに他の本と取り替える書店と違って、二ヶ月でも三ヶ月でも棚においてくれる図書館では、本が読者の目にとまる可能性が高い」(プーセルさん)からだ。

さらに、ジャンルごとに賞を用意しているアメリカ図書館協会から受賞をうけると、売上げ増加が期待できる点を、作家自身が意識するようになったともいう。例えば、「アカデミー賞」の児童書版と呼ばれるアメリカ図書館協会の「ニューベリー賞」に輝くと、約一〇万部の売上が受賞作に保証されるだけでなく、過去の作品も売れ始めるといわれる。ちなみに二〇〇一年の「ニューベリー賞」には、児童書作家リチャード・ベック氏の「ア・イヤ・ダウン・ヨルダー」(A Year Down Yonder)が輝いた。

図書館市場で増大する取次の役割

作家を図書館に送り込む以外に、出版社はどんな営業活動を行っているのか。「既刊書の売込みに努力している」というランダム・ハウスの大人用図書専門のマーケティンググループでは、ニューズレター、カタログ、電子メール、広告等を通して、絶えず既刊書の存在を図書館員に再認識させる努力をしている。例えば、超人気作家のジョン・グリシャムが新刊を出せば、そのお知らせだけでなく、グリシャムの既刊書リストも添付するといった具合だ。

また、年に六〜八回、業界全体、または州ごとに行なわれる展示会に参加し、直接図書館員に売り込む(写真4)。さらに図書館員の要請があれば、最低二五の図書館の参加を条件に、直接出向いて、説明会を行なう。例えばワシントンDCに出向けば、DC周辺のバージニア州、メリーランド州の図書館合わせて五〇以上の図書館の参加がみこまれる。参加図書館の予算を合計すると二〇〇万ドル以上にのぼるため、出かけるだけの価値があるというのだ。「カタログや広告などで宣伝しても、やはり直接図書館員と話すと効果が違う」とマーケティング部長のプーセルさんは強調する。

さらに、最近力を入れている活動が、取次との協力・連携作業という。例えばランダム・ハウスでは、同社の取次専門営業部隊と、図書マーケティング部隊、さらに数社の大手取次と図書館員の間で情報交換を行ない、共同販売促

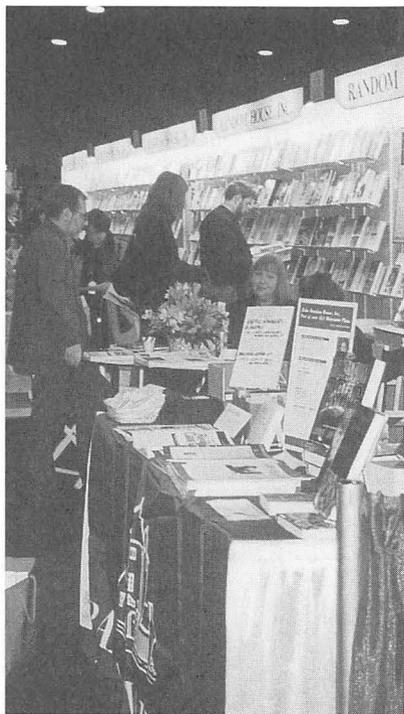


写真4 「ミッドウィンター・ミーティング」の展示場で図書館員に自社の本を売り込むランダム・ハウス・図書マーケティング部隊。展示場で実際に図書館から注文は受け付けていない。既刊書の存在を改めて認識してもらうことが展示目的という。

進活動を練ったりする。大手取次イングラム社の図書専門子会社、イングラム・ライブラリー・サービスの副社長、ラリー・プライス氏は「ここ四五年、出版社の間で図書館市場への関心が高まるにつれ、サプライ・チェーンにおける我が社の価値が高まってきた」と語る。

同氏によると、アメリカにおける図書館流通と書店流通の大きな違いは、出版社との直接取引が書店流通のほぼ七五%を占める一方、図書館流通では全くその逆でほぼ七五%が取次経由という。特に一九九〇年初めから、目録作りなどの業務を取次等に外部委託する動きが図書館の間で盛んになるにつれ、図書館における取次への依存度がさらに高まっている（注三）。直接取引が少なかったことから、

出版社にとって図書館市場全体は「見えない存在」だったのだ。そこで出版社が図書館市場の売行き、売れ筋などを理解する上で、長年図書館と付き合ってきた取次が蓄積する情報・経験が生きてくる。取次が、出版社と図書館を結ぶいわば「情報パイプ」の役割を担うというわけだ。

例えば、イングラムでは全米約一万の図書館にニューズレターを定期的に郵送し、本の情報を流したり、同社のサービスを宣伝しているが、その中に出版社の宣伝を盛り込んだり、出版社負担のチラシを挿入するなどして、図書館員の注意を喚起したりする。また、出版社と一緒に作家イベントを協賛して出版社、作家、図書館員を引き合わせ、出版社が直接図書館員と話すことで自社出版物の売行きを理

解する機会も作る。イングラム・ライブラリー・サービスのマーケティング部長エレン・マイリックさんは自分の役割を「イベントやニューズレターなどを通じて、出版社と図書館員の関係構築を促進すること」と定義づける。

インターネットの登場・拡大と共に 新たに問われる図書館の役割

一方公共図書館では、インターネットの導入にも積極的に取り組んでいる(写真五)。二〇〇〇年の調査によると、アメリカの公共図書館のうち約九五%がネットへのアクセスを提供している。また図書館によってはお年寄りや子供、マイノリティーを中心にインターネットやコンピュータの無料講習会などを開催しているところもある。こうした情報技術(ＩＴ)の導入・維持に、企業や財団の寄与も大きい。

最も有名なものでは、マイクロソフト社会長のビル・ゲイツ氏によるゲイツ・ライブラリー財団で、四億ドルを投じて二〇〇二年までに全米の公共図書館をネットにつなぐことを目指す。特に、アメリカの中でも貧しいアラバマ州、ミシシッピ州、アーカンソー州といった州の図書館では同財団の寄付金のおかげでネット導入に成功。同財団の寄付なしでは、公共図書館によるＩＴの導入が不完全に終わってしまうといわれる所以だ。

また図書館は電子本の導入にも前向きだ。二〇〇〇年の



写真5 1月12日～17日ワシントンDCで行われた「ミッドウィンター・ミーティング」での展示会模様。出展社では情報機器関係の業者が目立ち、出版社は大手でも地味な存在だ。大手出版社が大きな出展ブースを構える「ブック・エキスポ」と大きく異なる点でもある。

アメリカ図書館協会の調べによると、一五州約五〇の公共図書館が電子本の貸し出しを行っているという。貸し出しには、自宅または図書館のコンピュータで閲覧できる方法と、ロケット・イーブックといった電子本専門の機器と一緒に貸し出す方法が見られる。一九九八年から、まず大学図書館からビジネスを開拓していった電子本流通業者の「ネット・ライブラリー」では、二〇〇〇年一月から、全米規模で公共図書館に積極的な売込みを開始している(写真六)。同社の価格体系はハードカバーの印刷本とほぼ同様で、ポリューム・ディスクアウト制をとる。印刷本と類似の価格体系では電子本の値打ちが薄れるという意見もある。

るが、「場所もとらず、紛失、損傷もない電子本の方が、図書館にとって長期的には絶対お得」と同社関係者は強調する。

さて、アメリカ図書館協会では会員の要請に応じて、一八七六年の設立以来初めて、公共図書館、大学図書館も含めた全図書館のブランドイメージとその存在意義を国民の間で高めることを目指した宣伝活動、「アメリカの図書館キャンペーン」を、二〇〇一年四月一日より公けに開始する。テレビ、ラジオなどマスメディアを駆使しながら同協会は、図書館がデジタル時代においても社会的要請に柔軟に応え変化しながら、書店やインターネットと違ったユニークな存在として、広く国民に情報を供給していく重要な社会的役割を果たし続けていく点を訴えていくという。キャンペーンは、「@your library」というロゴマークのもとに五年間展開される予定だ。五〇〇万ドルの予算で始まる同キャンペーンは今後、企業等のスポンサーもつものり、国外の図書館とも協力し、運動を広げていく意向だ。

ワシントンDC公共図書館の図書館員モアさんは図書館の役割と責務について次のように語った。「図書館は、単なるエンターテインメントの場ではない。膨大な情報があるウェブの世界においても、着実に正しい情報が得られるよう導く、『情報のナビゲーター』としての役割を果たすよう期待されている。その期待にこたえていけるよう図書館は新しい技術を導入し、スタッフも教育していかねばいけない」。



写真6 「ミッドウィンター・ミーティング」で自社のサービスを図書館に売り込むネット・ライブラリー。

デジタル時代において、アメリカの公共図書館が今後も他国のお手本になりつつあるかどうかを試されている。

(注一) 米国会図書館は一九七七年、「本の中心地」(センター・フォー・ザー・ブック)というプロジェクトを立ち上げ、イベントの開催や刊行物などを通し、本、読書、図書館への関心を国民の間で高めることに努めてきた。これまで四一州とワシントンDCにある公共図書館を「本の中心地」の付属機関に指定。これらの機関では地域レベルの読書、読み書き推進活動を展開している。

(注二) 一九九九年の『ライブラリー・ジャーナル』の調べによると、公共図書館による資金集めのため活動、いわゆる募金活動は、一九九三年比で二二・八%増加し、調査対象約五〇〇の図書館のうち、三分の二が何らかの募金活動に従事しているという。募金活動から得る資金は、平均約一五万ドル。募金活動が図書館には欠かせない財源をもたらす手段になっていることを示す。

(注三) 一九九〇年代目立ち始めた図書館による外部委託は、その是非をめぐって全米の図書館で激しい議論が交わされ、一時話題の的にもなった。各企業の判断で中核となる事業を定め、不採算部門を外部委託するビジネスの世界と違い、図書館ではその中核機能が社会の変化に左右される。

委託問題は、その図書館の機能を改めて問うことになったともいわれる。中でも全米の公立図書館に波紋を投げかけたのが、ハワイ州立図書館が決めた、選書業務一切の外部委託であった。二五%の予算カットを迫られたハワイ州立図書館の館長ケイン氏は、図書館員の大量解雇と支部図書館の閉鎖を避けるため、一九九六年、取次のペーカー&テイラー(以下B&T)社と期限五年半、一一二〇万ドルの契約を交し、選書から購入、目録整理、分類作業等の一切を同社に委託することに決めた。

ハワイ州立図書館以外にも以前から目録整理、分類作業や、選書の一部を委託する例があった。全米図書館協会の

調べによると、一九九〇年代、最も盛んに外部委託が行なわれたのが目録作りだったという。

また一九九九年の都市図書館協議会の調べでは、調査対象の七二図書館のうち、五一%の図書館が目録作りの半分を外部委託していた。しかし、選書作業をすべて一業者に外部委託するのはハワイ州立図書館がはじめてだった。各地域住民のニーズに応えて蔵書を揃えるという公共図書館の使命を根幹から揺るがしかねないとみなされたのだ。

一九九六年三月、B&Tが同図書館の選書を開始してから、B&Tの不明瞭な料金体系をはじめ、その選書に図書館員や利用者の不満が噴出すると、波紋はさらに広がった。結局一九九七年夏、ハワイ州政府職員組合に訴えられた同州教育委員会が、図書館長ケイン氏に契約を破棄するよう勧告したため、同図書館の大胆な試みは終止符を打つことになった。

同図書館の外部委託問題が投げかけた波紋に対し、アメリカ図書館協会は一九九七年秋、タスクフォースを設立、図書館の目録作り、選書、経営の外部委託の現状について調査することに決めた。二〇〇〇年にまとめられた同協会タスクフォースの報告書「外部委託と私営化が図書館業務・経営に与える影響」では、外部委託自体が図書館業務・経営に悪影響を及ぼした証拠は見つからなかった一方、周到に準備・利用できれば、効果的なツールになり得る点が指摘された。

(ひしかわ・まき/米国ワシントンDC在住)

人文会研修旅行報告（名古屋・京都）

弘報委員会 平石 修（御茶の水書房）

東京駅八時二八分発ひかり七号は定刻通り出発しました。

いよいよ二〇世紀最後の人文会研修旅行の始まりです。今回の訪問地域は、一月に開店予定の大型書店栄ブックセラーズに対して既存の書店の関係はどう変化するのか、目の離せない名古屋地区とワンフロア一〇九〇坪で進出した旭屋書店京都店を軸に変動激しい京都地区の二つの地域を訪問することになりました。ご同行いただく取次店さまはトーハンの斎藤一夫専門書課長、日本出版販売の浜芳幸書籍仕入部課長、鈴木書店の甲斐信光取締役営業部長の三名です。会員社は二二社二二名で、総勢二五名の大部隊となりました。

人文会研修旅行の日程はハードスケジュールで有名ですが、会員担当者の平均年齢の上昇もあり、今回は若干余裕のある日程となりました。

日程は次の通りです。

一〇月一八日（水曜日）名古屋 ちくさ正文館 丸善名古屋栄店 三省堂書店名古屋テルミナ店 三省堂書店名

古屋高島屋店

一〇月一九日（木曜日）名古屋・京都 栄ブックセラーズ 紀伊國屋書店ロフト名古屋店 パルコブックセンター名古屋店 ジュンク堂書店京都店 ブックファースト京都店 京都大学生協ルネ

一〇月二〇日（金曜日）丸善京都河原町店 旭屋書店京都店 アバンティブックセンター

研修旅行の目的は、書店を拝見させていただき、人文書担当の書店員の方々の棚作りのお手伝いをする、の一語に尽きるのではないのでしょうか。そのために今回も多くの方と議論や意見交換・研修を行ってきました。以下は訪問書店さまのレポートです。

ちくさ正文館

名古屋の繁華街からチョット離れた位置で売場面積一七〇坪は、外的条件としてかなり厳しいものがあります。しかし人文書や歴史書の棚を拝見すると、仕入担当の古田一

晴氏の力量が遺憾なく發揮されているのがわかります。店に立ちお客さまの購入書籍を観察しながら棚を作るといふその姿勢は説得力が感じられました。教科書販売も部数が落ち、店売りも以前のような活気が無いと嘆いておられたが、ふんばって欲しい店のひとつです。

丸善名古屋本店

老舗の書店丸善さまで、人文書の棚は理工書の棚に比べ見劣りするのは否めません。六月にリニューアルを行ったことですが、全体的に本が少なく、専門書もボリューム感の無いようにみえました。一月に再リニューアルを行い、人文書については六〇%増を計画しているとのことでした。人文書担当の平松さんが「レベルの高い人文書の棚を作りたい、社会福祉関係の本を充実させたい」と大変意欲的なので、今後に期待したいです。

三省堂書店名古屋テルミナ店

名古屋駅の地下二階、二五〇坪の書店。三省堂書店グループの中でも坪効率の良いお店で知られています。人文書や専門書も多く、分類や展示方法を見ても本好きのお客さんが集まる書店という印象がするお店です。但し、今年の三月にJR名古屋駅に三省堂書店高島屋店が開店してから若干苦戦が続いています。手塚店長は「人文系は対前年比八〇%だが雑誌・文庫はほとんど影響が無い、高島屋店対策

としては文庫を三〇%増やし名古屋市内ではいちばん多くした。営業時間も三〇分延長し、生き残りをかけて仕事をしている」と語っていました。又、今後の課題としては高島屋店とのすみわけは可能なのかどうか?。可能とすればどうジャンル分けをすればよいのか?。など難しい問題があることも指摘していました。

三省堂書店名古屋高島屋店

JR名古屋駅に新店した高島屋の一一階に今年の三月、五〇〇坪で開店した。高島屋の知名度と明るくゆったりとしたお店の作りで終日お客さんで混んでいました。売上も順調で、理工・医書・人文・法経の各ジャンルが良く売れているとお話でした。神田店の半分の人数で売上は八〇%に達しているとのことでした(斎藤店長)。医書・看護系は三〇坪の面積をとり、他店でおかない本を置いてあるのが特徴だということですが、人文書系とくに専門書は層が薄い品揃えのように感じました。テルミナ店との関係もあるのかも知れませんが、坪数からいってももう少し人文書を充実して欲しいお店です。

栄ブックセライズ

一月三日に開店予定です。現在工事中のビルの中を小西・嶽山両取締役にご案内いただきました。栄・広小路呉服町交差点にある七階建のビルで、通りの向こう側は丸善

さんのお店があります。イベントホールやビデオの映写室などもあり、書籍・雑誌関係は八八〇坪六〇万冊の在庫を展示販売する予定だそうです。単なる大型書店ではなく、大人がそこに行けば情報が得られ、半日楽しく過ごせるような書籍を中心とした『大人のテーマパーク』が店のコンセプトということですが、開店後もう一度訪問しなければならぬお店でしょう。

紀伊國屋書店ロフト名古屋店

市の再開発計画で建てられた公共の施設も入居している複合ビル内にある、坪数五五〇坪の紀伊國屋書店さんとしては中堅に位置する書店。開店から四年が経過して、売上も順調に上がっていたが、名古屋駅に三省堂書店が進出してきたり、歩いて一〇分とはかからない所に大型書店が工事中であったりして、書店激戦地の様相を呈してきた。売上傾向は福祉・心理・教育の各ジャンルが売れているということですが。

バルコブックセンター名古屋店

名古屋バルコ東館の四階に位置し、坪数二三〇坪の書店だが、他のバルコと同じように芸術書・美術書に力を入れた品揃えになっている。ここ数年は人文会としても年に一度は訪問している書店だが、人文書の棚は年々縮小の傾向にある。

ジュンク堂書店京都店

売場面積は四五〇坪だが専門書・人文書の量・質においては京都地区では京大生協とナンバー一の位置を争っていることには、専門書の版元の目から見ても間違いのないところだろう。分類も社会と社会学が分かれて展示されているように、あるべき本がそこにある、というのは読者から見ても大変気持ちが良いのではないか。京都駅前にも〇〇〇坪を超える書店が出店したが、現在のところ極端な売上の減少は無いという。但し、人の流れが河原町から京都駅のほうへ動いているので、対策はキチンとたてなければと南浦店長は語っていた。例えば河原町にあるそれぞれの書店がジャンルごとの特色を出した品揃えを行い、地域として総合書店をめざすようなことも考えているという。

ブックファースト京都店

今年の一月末に倒産した駿々堂京宝店の後を引き継いで、六月三〇日に開店した新規の書店、売場面積は三三〇坪です。棚在庫をそのまま使用しているので、現在、在庫チェックと棚展示の見直しを急いで行っているとのことでした。売れ行きの良いのはコンピュータ・日本史・教育書の三ジャンルだそうです。店長の牛島さんは三省堂書店から期限付きでレンタルされた方です。忙しい中、時間をとって下さり、愚痴をこぼしながらも書店経営について我々に熱っぽく語ってくれた。応援したい書店のひとつです。

京都大学生協ルネ

専門書や人文書を購入する読者が、すぐ側にいるという外的条件が整っていることもあるが、書籍の展示はきちんとしている。生協の規模にもよると思うが教科書販売のみ力を入れていたり、町の一般書店となら変わらない品揃えをしている生協が多い中で、京大生協は専門書の版元には心強い生協のひとつといえるでしょう。

丸善京都河原町店

売場面積三八〇坪、京都の繁華街河原町通りに面しているにもかかわらず、パァッとしない感じがいつもしていた書店だった。それがこの半年ぐらいの間に人文社会科学系の棚に変化があらわれた。岡山店から移動された小松原さんと今年の三月に入社した元駿々堂の金住さんのシワザだ。とある専門書の版元営業マンにおしえられた。売上傾向は哲学と歴史が良いとのこと。仕入担当の金住さんは好奇心旺盛で社会に対して敏感なアンテナを持っている方。期待しています。

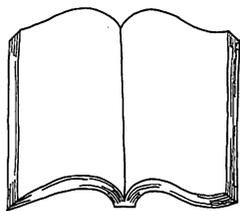
旭屋書店京都店

京都駅前プラッツ近鉄ビル五階、ワンフロア一〇五〇坪で今年の三月二五日に開店した。すぐ隣の京都タワー内にはふたば書房、駅の反対側にはアバンティブックセンターなど大型書店があるなかでの出店です。読者にとっては本

の選択のはばが広がりうれしい事ですが、書店にとっては生き残りをかけての闘いと言って良いでしょう。広い通路とゆったりとした棚作りで好感がもてますが、一〇〇万冊の在庫を誇る割には専門書・人文書が少ないように感じました。

アバンティブックセンター

京都駅新幹線口にあるフィスミーの六階、五〇〇坪の書店。旭屋書店の出現で、店全体の売上は約二〇%ダウンで低調だそうです。一〇〇〇坪の書店の出現でこの程度のダウンでおさまっているのは、健闘しているというのがお店の評価でした。当面品揃えや棚構成を変えらるということはないそうです。



二〇〇〇年度委員会活動について

第三回人文会年次総会が六月二日・三日伊東温泉「ひまわり苑」にて開催されました。ひまわり苑は、宰相・若槻礼次郎男爵の旧別邸で、なかなか風情のある和風旅館でした。

今回の総会で、十数年にわたって代表幹事をつとめていただいた菊池明郎氏（筑摩書房）が会長に、新たに代表幹事には福田晴行氏（みすず書房）が選任されました。議事は昨年度の全般的な活動報告から始まり、会計報告、各委員会の活動と続き最後に役員の改選を行い、無事終了致しました。

一九九九年は三年連続のマイナス成長となり、本の流れが逆流しているかのように返品が増えています。一方ではインターネットを利用したネットビジネスが次々と出てきています。人々のライフスタイルの変化にともない書籍の販売方法も多様になり、便利な反面さまざまな問題も浮かび上がってきています。問題解決の特効薬は無いというのが現実です。時代に即しているいろいろな活動を行ってきまして人文会ですが、書店での販売を促進する姿勢は一貫しているかと思えます。書店店頭活性化の一助にぜひ人文会をご利用下さい（新体制については人文会会員名簿を参照し

て下さい）。
各委員会の活動方針は次のとおりです。

販売企画委員会

委員長 内藤繁人（勁草書房）

創立三二年、歴史ある人文会の販売企画委員会委員長を務めるのも二年目となります。よろしくお願い申し上げます。基本に立ち返った仕事を進めたいと思っております。

「人文科学書の普及・販売」を積極的に推進することを当委員会の仕事と思っておりますので、書店の方々、取次店の皆様のご協力を頂いて、人文会二二社の良書の普及に努めて参りたいと思っております。

いま、人文書の販売に当たっては、厳しい状況であるようですが、人文書とは「人間形成のための基本図書」と考えますと、読書人口も多く、内容も教養書から学術書まであり、また分野も広域なもの特徴です。スペースの効率的な活用、内容の充実した棚作りによってこそ厳しいさも好転するものと思っております。

各種のセットもの、またフェアーなど積極的に展開して参ります。販売に関する企画案、ご要望などお寄せ頂けれ

ば幸いです。

新委員会のメンバーは次の通りです。

副委員長 田村謙二(有斐閣)

委員 對比地邦男(社会思想社)

後藤光行(日本評論社)

土屋知可夫(福村出版)

調査研修委員会

委員長 原田敦雄(大月書店)

人文会の委員長は二年の任期で交替するのがこれまでの慣習でしたが、後継者の育成に失敗したため連投の刑を科せられました。

委員会としては近年専門書の店頭展示が減少したり、客注も渋い顔をされたり心細い環境に陥っていますので結束して展示に協力的な書店さんを探していきたいと思えます。また著者のライフワークの著書でさえ思うように宣伝・販売できない状況を踏まえ、大学内の研究者への専門書案内ツールをつくり心ある書店・生協さんとの協同販売なども考えております。

相変わらず厳しい出版界ですがご協力のほど、お願いいたします。

新委員会のメンバーは次の通りです。

副委員長 鎌内宣行(春秋社)

委員 佐藤貞男(青木書店)

委員 新保卓夫(誠信書房)

藤代俊久(平凡社)

図書館委員会

委員長 成田共助(法政大学出版局)

△聞く▽・△見る▽・△調べる▽・△稼ぐ▽をテーマに活動された島田孝久さん(晶文社)の後任として図書館委員長を務めることとなりました。微力ながら全力をそそぎたいと思います。

人文会に図書館委員会が設置されてから、今年で九年目となります。この間、図書館見学・図書館関係者との研修懇談・蔵書調査等々の活動をしてまいりました。本年は、さらに積極的に推進し図書館にたずさわる多くの方々と、信頼関係を築き上げることが大事と考えております。

出版を取り巻く厳しい状況の中、二十一世紀を前に図書館界、出版界も大きく変わろうとしております。その変化に対応しつつ、着実な活動をしたいと思えます。また、読者からみても図書館の役割・図書館への期待がますます高まっております。委員会へのご要望など、是非お寄せ下さい。

関係者皆様の一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

委員会のメンバーは次の通りです。

副委員長 馬場正彦(吉川弘文館)

委員 島田孝久（晶文社）

大江治一郎（東京大学出版会）

弘報委員会

委員長 平石 修（御茶の水書房）

二代続けて委員長が任期途中でリタイアするというハプニングに見舞われた当委員会ですが、あたふたしながらも七月に『人文会ニュース』八七号を刊行しました。人文会ニュースは年三回の刊行を予定しています。内容は、書店の人文書棚担当の方が棚づくりやブックフェアのヒントになるような企画を心がけています。

ながい間の懸案事項でありました「人文会ホームページ」

ミネルヴァ書房

ケインズ・シム・ペーター！ ハイエタ 市場社会像を求めて

平井俊顕 二十世紀を代表する
経済学者三人の独自の市場社会
像を多面的に描き、またそれぞ
れの比較・検討から「市場社会
とは何か」を探る。四八〇〇円



がいよいよ立ち上がります。CD-ROM版でスタートした「人文書基本図書検索システム」を載せますので最新の情報を提供出来るかと思えます。その他各会員社へのリンクや日常業務で忙しい書店のみなさまの都合に合わせて連絡がとれる電子メールなどいろいろな仕組みを考えています。リアルタイムの人文会情報を直接書店のみなさまへお届けしますのでぜひ「人文会ホームページ」をご覧ください。新委員会のメンバーは次のとおりです。

副委員長 杉田啓三（ミネルヴァ書房）

委員 浴野英生（草思社）

段塚省吾（紀伊國屋書店）

平川恵一（筑摩書房）

D・A・レン／R・G・グリーンウッド 著 現代ビジネスの 革新者たち

井上昭一／伊藤健市／廣瀬幹好監訳 ビジネスを創造し、
教育・実践に大きく貢献してきたリーダーたちの生涯から
今われわれが学ぶべき理念とはなにか。三五〇〇円

MINERVA
BUSINESS
LIBRARY

〒607-8494 京都市山科局私書箱24
TEL 075-581-0296 FAX 075-581-0589
税別/宅配可 振01020-0-8076

人文会会員名簿

(〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21 みすず書房内)

2001. 3. 現在

社名	担当者	〒	所在地	電話	FAX
青木書店	佐藤 貞男	175-0092	板橋区赤塚8-12-12	5997-4051	5967-7691
大月書店	原田 敦雄	113-0033	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塚 省吾	150-8513	渋谷区東3-13-11	5469-5918	5469-5958
勁草書房	内藤 繁人	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
社会思想社	对比地邦男	113-0033	文京区本郷3-25-13		
			中銀本郷3丁目ビル	3813-8101	3813-9061
春秋社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	島田 孝久	101-0021	千代田区外神田2-1-12	3255-4501	3255-4506
誠信書房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
創元社	重光 義彦	162-0825	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草思社	浴野 英生	151-0051	渋谷区千駄ヶ谷2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑摩書房	平川 恵一	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	大江治一郎	113-8654	文京区本郷7-3-1		
			東京大学構内	3811-8814	3812-6958
日本評論社	後藤 光行	170-0005	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
平凡社	藤代 俊久	112-0001	文京区白山2-29-4		
			泉白山ビル	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北3-2-7		
			法政大学一口坂別館内	5214-5540	5214-5542
みすず書房	福田 晴行	113-0033	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607-8494	京都市山科区日ノ岡堤谷町1		
			(075) 581-5191 (075) 581-8379		
		101-0054	千代田区神田錦町3-6		
			石澤ビル3F	3296-1615	3296-1620
未來社	吉田 哲夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-8600
有斐閣	田村 謙二	101-0051	千代田区神田神保町2-17	3265-6811	3262-8035
吉川弘文館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544
(休会中) 福村出版		113-0033	文京区本郷2-30-7	3813-3981	3818-2786

会長 菊池 明郎
 代表幹事 福田 晴行
 会計幹事 重光 義彦
 書記幹事 吉田 哲夫

販売企画委員会 内藤 繁人・田村 謙二・对比地邦男・後藤 光行
 調査研修委員会 原田 敦雄・鎌内 宣行・佐藤 貞男・新保 卓夫・藤代 俊久
 図書館委員会 成田 共助・馬場 正彦・島田 孝久・大江治一郎
 弘報委員会 平石 修・杉田 啓三・段塚 省吾・浴野 英生・平川 恵一

森の人 四手井綱英の九十年

森まゆみ 里山の発見者にして森林生態学の創始者。森を守るために研究し自然保護にも力を貸した。豪放磊落な大学者の21世紀にたくす言葉。1995円

脳死移植は どこへ行く?

向井承子 臓器移植法をめぐる疑問に答え、ドナーカードにサインする前に一人一人が考えておかねばならぬことを、生活者の立場から明かす。1890円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話03(3255)4501 価格は税込
<http://www.shobunsha.co.jp/>

誠信書房

音楽家ならだれでも知って おきたい「からだ」のこと

アレクサンダー・テクニークとボディ・マッピング
B. コナブル/片桐ユズル・小野ひとみ
からだのしくみと動きを理解し、楽に自由に演奏できるようにするための本。 2000円

授業に生かすカウンセリング

エンカウンターを用いた心の教育
國分康孝・大友秀人著 対話のある授業を実践するためのノウハウを満載した。 1200円

職場の心の処方箋

産業カウンセリングルームへようこそ
増井武士著 働く人の心の悩みに独自の視点から気軽に質問形式で答える。 2000円

東京都文京区大塚3-20-6/電話03-3946-5666
<http://www.seishinshobo.co.jp/> <税別>

よみがえる部落史

上杉 聡

日本史を変えた新しい部落史!! 目からウロコ、今、部落史が面白い——部落差別はどこから来たのか? 信長・秀吉・家康と部落差別の関係は、などに答える。 ●一八〇〇円

ドキュメント 崩壊からの出発

渡辺美・小田桐誠著 《阪神大震災5年「生活再建」への挑戦》災害に立ち向かう市民・ボランティア・行政が知っておかなければならない貴重なノウハウ本! ●一六〇〇円
上笙一郎著 多彩な芸術家を育てた源泉とは ●四〇〇〇円

文化学院児童文学史稿

上笙一郎著 多彩な芸術家を育てた源泉とは ●四〇〇〇円

社会思想社

東京都文京区本郷3-25
☎03-3813-8101(税別)

相対主義の極北

■入不二基義 真理探求の果てにあるのは神か無か。クオリア問題や概念枠批判など論争的テーマを放しつつ、相対主義を極限まで徹底。3200円

科学から哲学へ

知識をめぐる虚構と現実

■佐藤徹郎 進歩する知識観など近代科学の知識神話を解体。自ら考え歩む道としての哲学を宣言。2500円

哲学・航海日誌 増刷出来

■野矢茂樹 2500円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎03-3255-9611(価格は税別)
<http://www.shunjusha.co.jp/>

刊 行 開 始 !

新しいぞ、明治は。文学が
とびつきり元気だった。

明治の文学

坪内祐三「編」全25巻

第1回2冊同時発売 各2400円

5二葉亭四迷◎編集解説 高橋源一郎

17樋口一葉◎編集解説 中野翠

「読みやすさ」を徹底追求！★内容見本呈

筑摩書房

お問合せ／サービスセンター 電 048-651-0053
http://www.chikumashobo.co.jp/ * 価格税別

「知の再発見」双書

■ 絵で読む世界文化史 ■

日本の歴史

一時を超える美と信仰—

N・ドウレ著 山折哲雄監修

神道、仏教、宮廷文化、武士道の出現、
禅宗、町人文化など、芸術と宗教でた
どるもう一つの日本史。1400円(税別)

巨石文化の謎

J-P・モエン著 蔵持不三也監修

古代の天文施設として有名なストーン
ヘンジやカルナックの巨大遺跡など、
新石器時代よりヨーロッパ各地に存在
する数々の遺跡を詳述。1400円(税別)

創元社 大阪市中央区淡路町4-3-6
東京都新宿区神楽坂4-3

草思社

嫌なもの嫌と
きっぱり伝える対話術
バルバラ・ベルクハーン／瀬野文教訳 ●1400円(税別)
あせらず落ち着いて自己主張するための秘訣を伝
授。つい一歩ひいてしまう人のための対話術!

イヌが教える

お金持ちになるための知恵

ボード・シエーファー／瀬野文教訳 ●1400円(税別)

これなら自分にもできる、と大評判! お金持ち
になる方法が自然に身につくイヌと少女の物語。

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8
☎03(3470)6565 http://www.soshisha.com/

丹野義彦・坂本真土

A5判／二四〇〇円

自分のところから読む
臨床心理学入門

「自分のところ」への興味・関心を臨床心理学へつなげ、
ひろげるテキスト。よくある心のトラブルである抑うつか
ら、対人不安、精神分裂病まで、実際の心理テストに自分
で答えながら、生きたところの研究の方法を学ぶ。

佐々木正人・三嶋博之編訳

A5判／三八〇〇円

アフォーダンスの構想

知覚研究の生態・心理学的デザイン
ギブソンがもたらした衝撃以降、「アフォーダンス」のアイ
デアを具体化した視覚・聴覚・触覚などの知覚研究と理
論的仕事のなかから、最も重要でユニークなものを編集。
今日の「生態心理学」研究の方法と水準を示す。

東京大学出版会 [価格税別]
東京都文京区本郷7-3-1 ☎03-3811-8814

リクエスト復刊 2000

現代人の思想セレクション
全3巻

1 大衆の時代

編集・解説 ● 鶴見俊輔
ベンヤミン、アドルノなどの名論文17篇

2 伝統と現代

編集・解説 ● 篠田一士
ボルヘス、折口信夫などの名論文15篇

3 未開と文明

編集・解説 ● 山口昌男
レヴィ=ストロース、今西錦司などの
名論文10篇

◆定価:各2400円(税別)

平凡社

東京都目黒区碑文谷5-16-19
☎03-5721-1234
http://www.heibonsha.co.jp/



日本評論社

http://www.nippyo.co.jp

動き出した朝鮮半島

南北統一と日本の選択

吉田康彦・進藤栄一／編

10月中旬刊

四六判 2200円

世界を驚かせた南北朝鮮首脳会談。歴史は大きく朝鮮半島の統一の方向に動きだした。統一のための課題は何か。その可能性は。南北朝鮮の政治、経済、外交の実態に迫るとともに、日本が選択すべき道を探る。

日朝国交正常化が今ほど求められている時はない。そのために何が必要か。そのことについて本書は、類書にない多くのことを与えてくれる。

村山富市(元首相)
サービスセンター ☎0492-74-1780(価格は税別)

法政大学出版局

http://www.h-up.com/

家庭や学校、職場において、報酬による動機づけは、いかにかに不毛であるかを、具体例にもとづいて明らかにする。経営者・管理者・先生方の必読書!

報酬主義をこえて

アルワイ・コーン／田中英史訳……五千八百円

時局に対する主張、作品の構想・草稿をも含む膨大な日記の完訳。オー・ストリアを代表する作家ムールジルの人と作品を解説するための必須文献!

ムージル日記

ローベルト・ムージル／圓子修平訳……二万八千円

102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎03-5214-5540 / 表示価格は税別です

◆好評発売中◆

政党政治の生みの親、原敬が、凶刀に倒れる日までの出来事を書きつづけた日記。近代日本政治の内情を照らし出す第一級の史料。人間原敬の真骨頂を知る興味あふれる日記!

内容見本呈!

原敬日記

没後八〇年記念出版

セット定価七五、六〇〇円

全六巻、分売不可

原 奎一郎編
六巻のみ林茂共編

- 第一巻 官界・言論人
- 第二巻 政界・進出
- 第三巻 内務大臣
- 第四巻 総裁就任
- 第五巻 首相時代
- 第六巻 総索引・関係資料

東京・文京
本郷 2-30-7

福村出版

電話 (03)
3813-3981

定価は5%税込 http://www.fukumura.co.jp/

未来社

http://www.miraisha.co.jp/

開国への布石

評伝・老中首座阿部正弘
 土居良三著
 国禁を破ってアメリカと国交を樹立した人物の生涯
 をダイナミックにとらえた力作。
 三五〇〇円

『モリ』地名と金属伝承 谷 有二著
 続・日本山岳伝承の謎
 東北から沖縄さらには朝鮮まで踏査して山にまつわ
 る金属伝承と日朝の交流を追う。
 二二〇〇円

『第二版』有賀喜左衛門著作集
 一九七一年に全二巻で一応完結した著作集に第一
 二巻と別巻「有賀喜左衛門研究」を加え、装いも新
 たに毎月一冊刊行中。定期予約はお早めに！

〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
 Tel. 03-3814-5521 Fax 03-3814-8600

シリーズ

「士農工商」の枠組みを捉え直し、
 豊かな近世像を鮮やかに描く新シリーズ

近世の身分的周縁

全6巻

好評刊行中

既刊5冊発売中、⑥11月10日刊 四六
 判・平均三〇〇頁 「内容見本」送呈

- ①民間に生きる宗教者 高荻利彦編 二八〇〇円
- ②芸能・文化の世界 横田冬彦編 二九〇〇円
- ③職人・親方・仲間 塚田 孝編 二八〇〇円
- ④商いの場と社会 吉田伸之編 二八〇〇円
- ⑤支配をささえる人々 久留島浩編 二八〇〇円
- ⑥身分を問い直す シンポジウム 二五〇〇円

吉川弘文館

価格
 税別

東京都文京区本郷7-2-8/電話03-3813-9151

シリーズ 現代批判の哲学

吉田傑俊[著]

国家と市民社会の哲学

両者の相克とその解決の方向を、現実の政治状
 況と哲学史を交差させつつ論究。 ¥2200

尾関周二[著]

環境と情報の人間学

共生・共同の社会に向けて
 環境・生命の破壊、進む情報化と市場化——
 “危機の時代”の人間観を問う。 ¥2200

シリーズ 社会学の思想⑤

アンリ・ルフェーヴル・斎藤日出治[訳・解説]

空間の生産

資本と国家による巧妙な空間の再編成に対
 抗する《空間の権利》宣言。〈4回記本〉¥7500

青木書店

東京都千代田区神田神保町1-60 [03]3219-2341・税別



有斐閣 新刊案内
 (価格税別)
 東京・神田・神保町2/F Tel.03-3255-6811
 http://www.yuhikaku.co.jp/

結婚の法律学

〔有斐閣選書〕
 一九〇〇円

棚村政行著 結婚・家族の法律上の仕組みを解説する
 とともに、制度の枠からとび出した新しい動きを紹介。

法女性学への招待 新版

山下泰子・戒能民江・神尾真知子・植野妙実子著◎国際
 法・家族法・労働法・憲法を中心に〔有斐閣選書〕一九〇〇円

若い女性の法律ガイド 第3版

大谷恭子・福島瑞穂著 派遣法の改正、男女共同参画社
 会基本法等、新しい情報を追加。四六判九八付一八〇〇円